

のである。ところが今度は其の土のやり場に困ってしまった。翁が着眼したのは、ちようど品川沖に台場を築く時だったので、これを上土として二千坪ばかり買い上げてくれるよう嘆願したが、半分も取り切れない。そこで更に二千坪の土を無代献納、但し運賃だけ下渡しを願ひ、許されてこれが全部除去となつた。これなどは実に翁の偉いところで、三、五、六番の台場がみんな此の地の土で出来たといふべきだ。悦甫翁が此の宿につくした功労は忘れてはなるまいと思ふ」

次「同感だ。今の人は、心持は刈部だが、悦甫からは一步も出ないなあ」

太「洒落たね。さあ又後戻りして、省線の保土ヶ谷駅へ行こう。東海道線の出来た時、駅名の文字を採用するにも一悶着あつたそうだ。又近年骨折つた結果、程を保土と改めたが、保土には確実なる史料が在るのだから、鉄道の方でもそう改めたのだ。さて海道に出る。神戸町上町七一一番地は昔の間屋場があつて、日々百人百疋の人足伝馬が継立てられた。日々名主一人年寄役八人帳付四人、書留役が二人馬指八人、これだけが宿から出張してやかましい制度であつたのだ。一寸した荷物の間違えがあつても村役不埒として十里四方追放などという厳罰さえあつたなどは、寧ろ不思議な位、伝馬の概略の話は、家へ帰つてからゆっくりすることにしよう。関係の文章も少々は保存してあるから見せよう」

次「東海道の踏切の手前の小溝の傍に四本の石標が目につくが何だろう。寄つて見よう。ははあ道標だ。ここから左へとつて昔の金沢鎌倉道の分岐点、道筋の今井川に架けた橋が金沢橋、それから福聚寺前から北向地藏の高台を過ぎて石名坂を下り、蒔田橋を渡つて大岡方面へ通じた、とこういう訳になるね」

太「二番目の表面にある、【程ヶ谷の枝道曲れ梅の花】、其爪は面白いね、一句がすぐに道しるべになるとは風流だな」

次「僕もそんな風にやつてるよ。【真直ぐに行けよ柳の両便所】、これはどうだい」

太「汚いねどうも。さて其爪きづめという俳人
 は本名を十寸見又次郎と云つて江戸吉
 原引手茶屋ひきでじや椽屋の養子、俳人と云うよ
 りも寧ろ河東節かとうかしで有名な人だよ。河東
 節があれだけ盛んになったのは三代目
 十寸見蘭州ますみらんしゅうのおかげだと云われるその
 蘭州が此の其爪だ。この句を書いた
 のが文化十二年正月十二日、死んだ
 のが文政十一年正月十日だ」

次「其爪は素性が分からぬという事になつていたが、よく分かつたね」

太「僕が調べたのではない加山道之助君だ、一寸うけ売をしたのだよ。何しろ文化文政以後天保にかけては、当時の洒落れ者や風流雅人はみな、

吉原をはじめ花柳の巷を背景とし舞台として踊つてたのだ。そういう雰
 囲気の中に生れた人々だから、諸所を遊び歩いて居たのだろう、句碑か
 ら推しても杉田の全盛がしのばれる。「面白いなあ」

次「踏切を渡つて突あたりが旧本陣の軽部三郎氏の家だ。本陣起立に関係する文章も君の手許にあるなら見たい」

太「よしよし、あとで伝馬と一緒にして見せてあげる」

次「この本陣は由緒のうちでも一等に尊いことは屢々天皇、皇后御通輦に際しては御小休所おごやすみどころにあてさせられた畏き蹟あじとなつてることだ。邸内の井戸は御膳水として使用されたというからは是も聖蹟記念の一つと申すべ
 きだ」

太「見給え線路を隔てて又寺があるぞ。真言宗の大仙寺だ、圓融帝の天祿年間えんじゅうてい、てんれんくの創立、ここに軽部家の墓がある。木村担平、幸田南技など沢山有名な人々の墓に並んで、力持おでんの墓もある。一度詣つて行くか」
 次「こうして再び元町方面を望んで来ると、昔の事がさながらに思い出さ



保土ヶ谷の道しるべ

れる。此の辺りだね旅屋が沢山軒を並べていて飯売女が盛にエロを發揮していたところというのは」

太「土地繁栄の最上策に遊び相手の宿と女とを設けるのは古今東西どこの国でも同じだが、事の善悪は別としてこうした結果が所の繁昌を来していることだけは事実なのだ。飯売女というのがいて脂粉の香を交えて客をもてなしたのが遊女の特権というようになり、慶長六年に東海道が始まって以来こんな女が出現して風儀を悪くする、五十九年後の万治二年に禁止したが、そうなると宿駅の淋しくなるのは当然の話、享保三年に禁止が解かれた。一戸に二人宛ならいと制限せられても、内にはおそらくもつと隠れていたに相違ない。文化年間には五十二軒の宿屋があったというから最少限度二人づつと見ても百人を越える。明治四年の調査では飯売女が百二十四、玉高七万一千百六十三、宿益高百五十圓、酌婦一人揚代金二朱とあった」

次「そうして暮すによい程ともかくも繁栄したんだね」
太「そうだと見える。明治十七年にこんな種類の女が廃されて遊郭が出来た。廃れてもちつとも惜むべきものではないが、只宿場の中心としての土地と、それを暗い方から助成した飯売女のようなものの介在を考えるとかやはりそこに昔の歴史が果敢なくくり掘げられるのだ」

次「大分センチメンタルな話になったね。従ってこれらに関する文書なども君のところに蒐めてあるんだろう」

太「従って、とは可笑しい冒頭だが、あるよ。これもあとでお目にかけることにする」

次「この通りは昔遊女のあったところだ、其の名残りの家がまだ二三あるね。やあいつの間にか外川神社の入口へ来ている。定めし由々しい靈験譚もあるだろう。一つ願いますかな」

太「明治二年に、此の宿内に湯殿山の講中があったんだ、先達の清宮與一という男が出羽の三山、即ち月山羽黒湯殿の三山を巡拝した時、羽黒山

麓の外川仙人大権現の分霊を勧請して、自分の邸に祀つたのが抑もの始めで、子供の虫封じ、航海の安全、それらを祈る者が遠近から押しかけて来る、折から神仏混合分離の時代だったので、日本武尊を祭神と仰いで外川神社と改めた。境内に道祖神の祠があるが、昔は海道べりにあって旅人は勿論、鬼と取組むような雲助連中さえも、此の祠の前では鉢巻きをとって跪いたという話だ。五十三次中一番靈験のある道祖神と崇められたものだ」

次「とても巨きな草鞋が奉納されているもの、足が達者になるようにという祈願だろう。それに足疾のある者が祈って平癒になればそのお礼ということも加わるらしい」

太「報養というものは由来そうしたことが根源だ。ところで此の道祖神が大変に子供を好まれる。面白い話があるから簡単にそれを語って聞かせよう。ある時近所の子供が大勢出て来て、境内をあちこち飛廻る、神体を引っぱり出してから其の首玉へ縄などをかけてごろごろと転がしては遊んでいる。そこへお詣りに来た老婆が見付けていや吃驚したのしないのって、勿体ないことをするいたずら子供奴、罰が当たるのを知らぬかとばかりに散々に叱り飛ばして石像を起こしたり泥を払ったりもとの位置に直したりしてお託をした。さて老婆はその夜から非常に大熱だ。医者だ薬だと騒いでも一向本復しない。人に占を頼むと即ち道祖神の怒りにふれた為だとある。折角子供らと面白く楽しく遊んでいたところを、お節介にも止めだてして子供らを怒つたのが気に入らぬ。此の後ともに子供らを怒鳴ったりしたら早々命をとるからそう思えと来た。老婆はびつくり仰天、早速お詫びをする、あたりの子供を集めて菓子飴などの振舞をする、神も納得したと見えて間もなくけろりとよくなったという。それから子供が乱暴な事をして決して怪我をしないのは、偏に此の神の加護だとして、親達も安心して手放すということだ」

次「神人和合の極致というのはそのことで実に面白い話だ。子供は人界

の神、神は神界の子供でもあるから、へんに咎め立てすると憎まれる訳だ。全人類の世界もそこ迄いかなくちや嘘だよ」

太「などと君の理想論を一言聞いてると僕もだんだん偉くなるような気がする。それはそうと此の辺りだね一里塚のあった所は」

次「そうだ、外川仙人の前榎木茶屋の所にあつたのだが、勿論今は跡方もないね」

太「往還の史蹟としては見過せぬものだ、

一里塚の事は「箕輪筆記」永禄四年の條に書かれてあるところを見ると、

其れ以前から制度のあつたことは確かだ、東海、東山、中仙等の街道に一里

塚を築かせたのは、家康の発案で慶長九年二月であつた。菅笠に草鞋履きの

道中姿を思い出させるよ。話に味が入つてる内に海道名残の並木へ来たぜ。

全くいいなあ。此所へ来ると、北斎や広重の絵に魂のあつたことが分る。然し最近

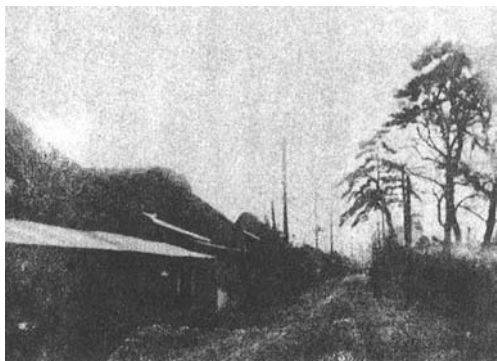
は並木を少々ならず邪魔もの扱いにして、やれ道路改修のやれ地目変換のと目前の小利をふりかざして、歴史に古いこうした並木を惜げもなく伐採してしまふ風になつて

来たから、実に残念な話だ。心ある土地では官民とも一致してこんな並木があれば、たとえ五六本でも保存に腐心している。ここでもどうかして何時迄もこの尊い遺物を保護し保存するように努められたいもんだ。」

次「全く同感だ。古典も風味も斧を入れてどんどん除去してしまひ、其のあとへ電柱とペンキと硝子とがのさばると日本の面影はどこへ行くか、

是れを憤慨しない奴があるなら、国史を棄てると同罪だ。郷土の人々は

結束して此の問題を考えねばなるまい。郷土から延いては国の緊要な事柄になるからね」



昔ながらの保土ヶ谷

太「すこし憤慨したら足が早くなつて、君には又かと言われるだろうが、それ向うの右側の小高い処に大櫓の茂つて見えるのが日蓮宗の妙秀山樹源寺だよ。此の大櫓があるから樹源という寺号も出た位、樹齡七百年といわれる。話するうちに来てしまった。よく見てくれ給え」

次「成る程此奴は巨きいね。いや大したもんだ。所謂神木の部に属するもんだね。何か此の樹に伝説がありそうなものじゃないか」

太「勿論大有りさ。日健上人という住僧は此の寺の十一世に座つた人だが、ある年大病で寝ていると夜中此の

樹の空洞に棲む白蛇が、美しい天女のような姿の女になつてきた。

自分は蛇地獄に墜ちたものだが、朝夕法華の妙典を耳にしたのでも

う成仏する因も芽して来た。我を源龍大善神として祀りくれるなら、

お前の病気を即座に癒してやろうというお告げだ。覚めて見るとこれ

は夢中の話、そこで早速此の洞穴に小さな祠を造つて祈ると、病も立ちどころに平癒する、それから斯うしてしめ縄を張り繞らして居るのは。面白いだらう」



樹源寺の大櫓

次「うん愉快だね、寺の縁起も古い事を言つてるからね」

太「そう寛永年中に軽部吉重という人の室が此の宗門に帰依して妙秀と

いつたので山号の名となつたが、尤も此の樹の傍に昔古真言の医王寺と

いうのがあつた跡なんで、そこへ寺を建てて日了上人を迎え込み、櫓に

木中に指定されて保護木になつている」

次「この辺りの両側は昔のまんまの気分がする。屋根は草ぶき、家棟の造作も一寸した材木のあしらい方も、東海道の脚當時の匂があつてたま

らないね」

太「元町から右へ登るところ、これが有名な権太坂だ。今はそんな感じもないけれど、昔なら藤沢、戸塚から上下の客がここへ来ると相應に疲れしてしまう。お茶を一杯欲しいなあと思う距離に此の坂があるんで、いわば保土ヶ谷はあの難所があるんで繁昌したともいえようと思う」

次「自然と人生の歴史は一寸してもそんな所が面白いな、そして年中賑わったのかい」

太「毎年四月の二十九日から九月の片瀬の御会式迄の間が一番賑ったと云う事だ。それから大山詣で、富士登山、片瀬まいりなどの時は別して混む、昔はここに七八軒の茶屋があつて例の留女が四五人から七八人位ずついたという、其の女どもは揃いの派手な着物に赤いたすき、鹿子絞りの前垂、銀杏返しとか島田とかに髪を結上げて白粉をこつてり塗らうという風情、これが毎日五六十人も一斉に出て来てペチャペチャやろうという、その客を呼ぶ声が面白い、団子がよければコロガリます、豆がよければハジケます。章魚がよければ吸いつきます。なんと云うのだ。花より団子の人もあれば団子より花がいいとて巫山戯て通る客もある。器量よりは力のある女の方が給金が多かつたというのがその理由が君分かるかい」

次「おつと皆までいい給うな。其の位の事は想像もつきさ。そうして見ると世の中は実際変化したね。不思議な位だ」

太「坂の名の由来を聞くとこうだ。ある旅人が丁度そこに居た老人に此の坂を尋ねたところ、耳の遠い老人自分の名を問はれたと思つて権左と答えた。それが訛つて権太坂となつたからほんとうは権左坂なんだとある。何だが拵え事の様だがまあ珍談というからそうして置こうよ」

次「感嘆之を久しうしているうちにとうとう武蔵相模の国境、著名な境木へ来たね。昔の広重などの風景画と比べると今は流石に寂しいもんだな。どうだいいれに地藏堂が、話相手を欲しそうに建つてるじゃないか。一

ぶくやろう」

太「あの地藏堂の手前の右側の家ね、あれが若林喜助氏の邸だ。昔は境木の立場でこんな狭い道を上下するのだからどんなに繁昌したろうか一寸想像さえつかぬ位だ。若林家は明治天皇御東幸の砌には御小休所に



境木の地藏尊

充てられた光栄を有して居る。地藏堂も汽車の開通するまでは実によくお詣り客があつたという。それが世の中と逆比例して人足が絶え、それに関東大震災で打倒され、見るかげもなく荒廃したのを、こうして奇特な信心家の力で再建され、時に慰め顔に和讃などを聞かせているという状態だとある」

次「神仏にも降替興廢があること人間と同じだから仕方があるまい。一体此の地藏さんは何処から来たのかしら」

太「はつきり年代は分らぬが、何でも昔由比ヶ浜へゆり上げられたというから海中出現なんだろう。五尺ほどの石の地藏だからどうも運搬しにくい。何十年も経過してから今度は腰越の海辺へ表われた。ある夜漁夫の夢にこの地藏が告げているには、俺は江戸へ行きたいと考えてるから車へ乗せて連れて行って貰いたい、然しもし其の車が動かずなったらそこへ置いてくれ、その代り此の海にはいつも大漁のあるように守護してやろうとね」

次「石の地藏もなかなか固い交換条件を提出したもんだね」

太「やがてお告げの通り牛車へ乗せてゆらゆら動き出して此所まで来ると、さあどうしても進まない。約束どおり堂を結んで安置したということになると、江戸が好きなら江戸っ子が願つら一番よく叶えてくれるだろう

と、そこは江戸っ子慾も任侠も手伝つて参詣に群集した。この地藏尊のために江戸人が浜へ流れ込んだ時代もあったんだから忘れちゃならないだろう。知っているだろう有名な野毛山の時鐘、明治元年から大正の震災迄鳴り響いていたあの鐘も、江戸吉原講中から寄進した此の地藏さまのものだったのだ」

次「伝説といえば境木の山頂には血桜の仇討というのがあったね。それまで聞いては日が暮れる。さあ又保土ヶ谷指して引返すとしようや。登りよりは下るが楽の権太坂、一体境木辺りの高地は脚氣病にいいと云って来るから健康地には相違ないが、空気が清澄な為かそれとも又別に不思議なことでもあるのか」

太「そこは天然の神秘だから、いわば万人が経験してよいとしたと見る方がよからう。高燥で温湿で適當で、空気が綺麗なれば申分があるまい。ああ別荘をここに欲しいな」

次「江戸名所図会を見るとここで上杉謙信が戦つたとあるし、十三塚もあつて是に関連するようにも考えられるが、果して謙信がここへ来たろうかしら。」

太「さあ上杉も謙信でない上杉家かも知れんぞ。本陣脇の市営バスの停留所から新設二十二米の大道を、こうして一町程来ると左側の谷戸から見上げるばかりの急坂があるだろう。久保山方面によつたあの松林の中に、お鍋稻荷というのが祀られた面白い伝説がある」

次「稻荷の名前もいろいろ奇抜なのがあるが、蓋しおなべなんて云うのは下女と共通しての名らしくて面白いね」

太「なかなかエロ味もあればグロ味があるから話して見よう。話しはざつと百年程前に遡る。この宿の音次郎という者が隣の永田村へ行く途中、野狐が一匹昼寝してのを見付けた。誰にもあること音次郎からかい半分石を投げると、うまく狐の左足へ中つたから吃驚して穴へ逃込んだ。此の音次郎馴染の女が宿内の新屋彦四郎抱えなべというのであつたが、

此の狐が件のなべ女に化けて音次郎の側を離れない、それが音次郎の目にはすっかり見えて余人には見えないのだ。果は氣狂のようになって来る。女の容色で左足をおられた怨を諄々という、穴の上に祠を建てて稲荷に祀ってくれ、今あるものを修復してもよいなど少々讓歩したことまで言う。聞く人はびつくりしてすぐさま申出のようにする。音次郎の病氣は平癒する。諸人が信心する。参詣者が来る。というような話なのだ。」

次「そこで我々も感心する。という訳かね。おやバス停留所の裏から絃歌が聞こえて来るぞ。あああの辺りが保土ヶ谷の妓楼のあるところなんだね」

太「裏山の岩間上町に村社八幡神社があつて、此の境内から菊水観音出現という物語もある」

次「此戸部方面へ電車線に沿うて進むこと一町余り、右へ屈る坂路は金沢道だと分つたが、左の中腹のところにも又お寺が見えるじゃないか」

太「又とはへんな云い草だね。臨済宗の岩間山福聚寺さ、建武二年の創建とあるから南北朝時代初期のもんだ。むかしは字道上辺りにあつたのを後年ここに移したとある。境内には保土ヶ谷の名物男だつた大親分の半鐘兼の墓もある」

太「この電車線路の向う側は、区制施行の時に中区に編入されて了つたのだから、此の線路に沿うている安楽寺や圓福寺、杉山神社などはこちらの領分でなくなつたが、保土ヶ谷は実家だ、親類廻りのつもりで一寸お詣りしようよ」

次「モチだ。茲には面白い伝説があるというではないか」

次「あるよ、さつき話した菊水観音出現の夢物語り、これは安楽寺の住僧の事だ。圓福寺には筍地蔵、面白い名だろう。杉山神社にある素晴らしい燈籠の一对、これが伊勢大神宮となつて居る怪偉。あるね。だがこんな事を話していると日が暮れてしまうから、後で話をしよう。横浜叢書の「伝説と口碑」に書かなかつたのがあるから、それと一所に話そ

うよ」

次「福聚寺の門前から十数間上つて御所台の井戸というのは、ああこれだね。尼將軍政子がここで化粧した清水というのは面白い話だね。水心あらば昔を語れ秋の風だ」

太「尼將軍の話ばかりか明治天皇御小休の時、この水が御膳水になったことがあるよ。せめて此の話でもしてくれればいいがね。誘う水あらばという風には行かんかなあ」

次「平地になった所の正面に石地藏があるね。今日はどうもお寺と石地藏が目につく日だ」

太「ここは永田方面へ下る分岐点だが、これが北向地藏と云つてね、やはり伝説の持主でいらつしやる。迷う人を救うたことはどこの地藏談とも似ているのだが、只江戸の方角、即ち北を向いて居るので人呼んで北向地藏というた。修繕などの場合少しでも位置が変更すると、必ず正しく北を向くというが、今でも月の二十四日は念仏構仲間が此地蔵のもとに集るのが慣習となつてる」

次「台座の下がつまり道しるべになっているんだね。考えたもんだね

太「そこが所謂ちまたのお地藏さまとしての信仰を繋ぐ一つの方便でもあつたのだ」

太「久保町の杉山神社前から踏切りを越えて区役所に一寸顔を出して、再び星川方面へ出かけて見よう」

太「神戸下町の神明社横を星川へ行く途中にうつる近代的壯観は、仕方がないから保土ヶ谷の名物とでもして置こうか、大日本麦酒の保土ヶ谷工場、浅野カーリット、曹達会社、星川染色工場、メリヤス工場、其の外大小の工場から吐出す煙突の黒煙は、実に天日も曇るばかり、見給え此の広場に積累ねられた硝子壺、無風流なものでもこうして幾百万本と集められると一寸芸術的になるね」

次「でもな感傷的作品よりはずつといい。星川町だ。左方何十段の石段の

上に、又お寺が見えるなあ」

太「又お寺か、はゝゝゝ。あれは日蓮宗の光栄山法性寺、元和二年に法性院日在上人が開山となり、芝生村の齋藤忠兵衛が開基したという寺だ。寺実には、日蓮龍ノ口法難の時、牡丹餅を皿に盛るとまなくて鍋蓋のままを進めた老婆のあったことは有名な物語だが、これに書いたのが鍋蓋本尊、享和三年に江戸の吉原江戸町山本町てつ女がこの寺へ寄進したもので其の外比企能員書写という紺地金泥の法華経八品もある。それから此の星川には曲題目というて世間稀に聞くものが今尚残っている。お題目に節をつけ、太鼓の鳴物入で躍るように仕組んであるが、根本はその踊念仏と同じものなのだろう。どうして出来たかについても亦いろいろの解説があるようだ」

次「此の寺で思い出したことがある。本堂の欄間には元鎌倉法華堂にあった彫刻を箆めてあったが、それを古物商が外国人へ売込むべく弁天通の商店へ持出したのを、亀樂煎餅の長谷川喜樂翁が買取って寄進したという話がある。世の中には、心掛の善悪でこれほどちがう人があるからな」

太「まあそんなもんだな。此の裏山には氏神の杉山神社があり、又其の付近には加賀屋敷址とか、かんかん井戸とか、お内匠様とかいう遺蹟がある。時間がある時に訪ねることにしよう」

次「やあ星川小学校で子供らが遊戯してるぜ。ああ嬉しそうだなあ。俺ももう一度あんな時代に返りたいな。学校の旧校地が左の高台の広場だったと聞いている」

太「それともう一つはそこが浅間寶寺の旧跡でもあるのだ。武蔵風土記にも享保頃に沢山の枯骨を掘出したのでその供養に石地蔵を建立したと書いてある。その石地蔵は、学校がここに建築される時、和田村の眞福寺に移されて今も門前にある筈だ。丘の上からは石器時代の遺物も相応に出るので、考古学者間にも評判になつてゐる所だ」

次「二三町来て仏向町へ這入つたら、ほら又左にお寺が見え出したぞ」

太「あれが曹洞宗の仏向山正福院だ。これは永享以前(二四二七)の創建で、風土記を見ると此の寺の先住(せじゆう)で堯室という僧が、初めて北条家に謁見(えつけん)した時、希望して仏向山の山号を許して貰ったということが書いてある。境内には白山妙理大権現外記薩埵(はくさんまうりだいたんげんげきさつた) というのがあって、頗る付の靈驗談(れいげんだん)が残っているからこれを少し歩きながら語って見よう」

次「物あれば必ず名あり、名あれば必ず伝へありか、随分とご苦勞千萬な話だ。保土ヶ谷の名誉にかけてよつく承わりましょう」

太「何もそんなに力むには及ばないよ。子供が百日咳に罹(かか)って苦しむ時、この外記薩埵(げきさつた)に祈るとよく癒る、その御礼として赤い頭巾を奉納する。これだけの話だが難病の百日咳だけに親達は皆參詣に来るらしい。して見ると此の外記という人が、呼吸器の病気で倒れたのでこういう大願で遺したともいふべきだろうと思う。寺から出す信者心得の事という書付を見るとこう記してある。此の護符は当院外記薩埵の大願力に依て布施するものにして小兒百日咳平癒の靈符なり、夙(はや)く進めて薩埵の願力に浴みせられんことを

御名號 相鏡妙圓外記薩埵

用い方は包みある符は朝一日一度清浄水の初穂にて飲むべし護符を用うる間は信心を専念にし加持祈祷中は両親かわり勉めて精進すべし心願成就の方は赤き頭巾を奉納せられよ

武州橘樹郡保土ヶ谷町仏向 正福禪院

とね」

次「自分の死後に至る迄人の苦難を救済せんとする。その念力や賞むべく崇むべしだね。そこで拙詠を献じよう。

百日の苦難さつたと拝むのも、

はるげき人の正福ぞかし

太「面白いね、そこで我等もここを去ったとして、仏向町の鎮守は杉山社

に参拜、それから水道浄水場の方へ向つて坂本町へ出よう」

次「浄水場への登り口、左の林の方に見える建物は」

太「あれは高根大権現たかねだいこんげんの古い社だ。昔は下の病しよに験しるしがあるというので保土ヶ谷宿の飯売女めしうりおんなどもが引切りひききりなしに詣つたという話だ。大願が成就すると鏡を納める例があつたなどは土地だけに愉快だねえ。石造の陽物ようぶつが御身体ごんていだからいわばほんとの道陸神どうりくじんから転じた幸さいの神だったのだ。禁止せられる前に盗み出した奴があるそうだ」

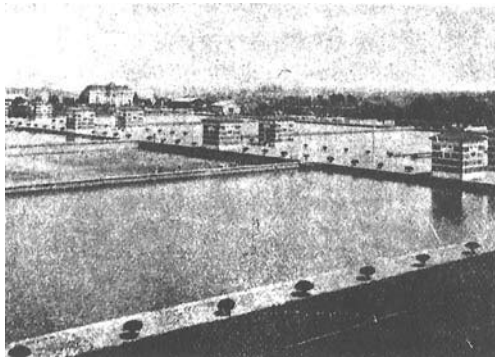
次「そうすることも大願成就であつたかも知れぬ。坂を数町やれやれと登つたら見え出したのが西谷の浄水場だ。満々と湛たえたこの水、此の水こそは市民の糧かてになるものなのだ。ああ雄渾ゆうこんな見ものの一といつてよいだろう」

太「さあ元の道を帰つて八王子往還へ出よう。それこれが神中鉄道上屋川駅の前だ」

次「そうすると正面の山は源頼朝が茶を煮たという釜かま檀山だんざんだろう」

太「その通りだ。石を重ねた上の石に丸い穴があり、それが茶を煮た釜檀石だというが、富士の裾野に狩りした時、わざわざ此所こゝ迄まで来て茶を煮たかどうか怪しい伝説のようにも聞こえる。或は又これも石器時代の遺蹟なのかも知れぬ。只昔から此の石に付着する苔こけを剥はして飲のむと、咳病や風邪によいとされた。癒いれば竹筒へ酒を入れて捧げる。今ではビール壺などに茶を入れて備えている」

次「いづれそんな事だろうと思つていた。そして其の石は今どうなつてる」
太「特殊な所の人が自分の蔵へ大切に保存しているそうだよ。当時の茶の



西谷浄水場

湯にした井戸が附近の民家にあつて、かんてん旱天にも決して減水しないとも伝えられて居る。井戸だけは深くてよい水らしい話だ」

次「上星川町の杉山社を拜んで左へ入ると又寺が出た」

太「寺が出たは可笑しいな、我々が来たんだよ。これが曹洞の薬王山東光寺で、正福院の堯室和尚がここをも開いて居る。開山は小机雲松院廿八世明岩和尚とあるがその年代は明白でない。本尊の薬師如来は伝行基の力作、さてこの寺でみんなが驚くものがある。どうだこれが有名な生木なまきの山門だ」



東光寺のつげの門

次「いやあ成る程、つげが二本で互に門の形を作つてる、実に見事なものだよ」

太「洒落れてはいけない。東光寺を出て数町来ると、ほら又右の方に曹洞宗の正観寺が又出て来たぞ」

次「人の真似をしちや駄目だ。君は説明役の方だから」

太「ここには曹洞が相当ある。なに語呂ごりご合せだつて、まあまあこの正観寺は小田原北條の臣中田藤左衛門という人父加賀守の菩提ぼだいとして文祿ぶんろく三年(一九四)に小庵を営み、随流院ずいりゅういんの六世を開山に迎えて一寺としたもので、境内の弁才天には又伝説がある。裏山の崖が崩れてお宮諸共もろともに土中に埋もり、穴の位置が分らないので四十年余もその儘ままにしたとは、相手がいくら温おど和なしい弁天様でも呑気のんきな話だ。大正十五年(一九二六)の正月二十四日、寺の大檀那おおだんな中田という人のところへ村の衆二三人がやって来て、弁天さまの穴を掘つてもよいかと云う話だ。段々其の訳を聞いて見ると、此の三人の夢に三度も大蛇が来て、自分は弁天だが穴が塞がって困っているから

早く掘つて呉れる頼むのです。それが昨年の暮から今までにあつた事ですとの話なので、それでは近所の人々と力を協せて漸々穴を掘出した。それから夢にも来ない。よい事が続く、お詣りの人が殖える。それが縁となつて震災の時破壊されたまままであつた寺が再建する。ところが弁天様が荒れて困るとの苦情が附近から出た。見ると檀家のどの家へも大蛇が廻つて行つたような跡がある。これは定めし栖居が無い為であるうとて、金を出し合つて本堂を建てた。本堂が出来上がつてからは出現しなかつたということだ」

次「ふうむ、何だか弁天様が大蛇と結託して宣伝してるようにも聞こえるが、何やらも信心からとあるから、奇特な信仰家には全く以て觀面な話と受けられることだろう。何だ、又寺か、妙福寺とあるから日蓮宗だな。門の前にある此の題目碑は素晴らしく大きいなあ。サア川嶋の随流院と村社杉山社の参拝がもう済んだから和田町へ行くことにしよう。君、大分疲れたね」

太「疲れたな。然し面白いからさして苦にならない。上星川駅前から二丁余り山の出鼻の往来に一基の石碑が突立っているのが見えるだろう。あれは昔、八王子往還和田村山中行旅の苦難を察して、これを援わん為に新道を開鑿した時の記念碑だぜ」

次「それは有難い記念だね。やあ又寺があるぞ」

太「眞福寺と称するもの、これは大照山不動院といつて和田義盛の建立とある。境内にはこの義盛に因縁のある和田稻荷というのが祀られてある」

次「左衛門尉ともある荒武者が、莫迦に仏心を出したもんだな」

太「熊谷が蓮生坊になる時代だ。義盛だつて仏心のない事はなかるうさ。何でも十一面觀世音が夢枕に立つて、此の地が稻荷神靈地だと教えて、隨喜の涙を流して建立した寺だとあつた。什宝の中には頼朝寄進という觀音像などもあつた筈だ」

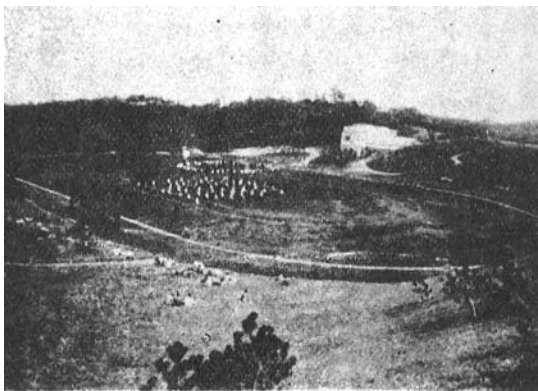
次「寺を出ると間もなく常盤公園の入口だ。故岡野欣之助氏が公衆の為に

巨費を投じて施設したところ、九千坪の広表ひろはらに梅と桜が絵のように植えられて居るが、秋の紅葉も見廻のがすことは出来ない。その隣が十六万坪を有する東洋一といはれるゴルフの競技場だよ、これはたしか保土ヶ谷カントリークラブの経営だった。遠望だけしよう」

太「まだあるよ、カタビラ葡萄園ぶどうえんさ、一万坪以上の広大な園に葡萄が一杯なっている。素ばらしいもんだよ」

次「そうそう国産奨励の世の中だ。此の園から出している皇国ブドー酒の売れるのも当たり前だよ。宮内省だの大学だのに出しているところこの主人が威張って居たつけ」

太「それから横浜市児童遊園地が此の区内にあるのを忘れてはならぬ。こんな施設は他の都市ではまだ見ないもので、面積三万七千八百坪、児童専用のもは至れり尽せりの設備だ、園中には本市出身の戦病死者せんびょうしやの霊を祀る忠魂碑ちゆうこんなどもある。こうし



横浜市児童遊園地

た施設がいかに国家的意義を有するかは説明する要もあるまいと思う」

次「その通りだ。いや随分と歩き廻ってそろそろ秋の日も西山に傾こうとする、我等の腹は北山へ傾いた。見残したところは後日に譲って、さあそろりそろりと戻りましょうよ。

「さらば〜」

次「いづれもさらば〜」